

伝統的工芸品・瀬戸染付焼の技術を活かした高付加価値製品の製造における  
品質・生産性の向上

## 染付窯屋眞窯

# 意匠と機能を備えた伝統の瀬戸焼 高付加価値食器製造でファン獲得

### 時代の変化で磁器の需要減



釉薬をかけない製法の食器

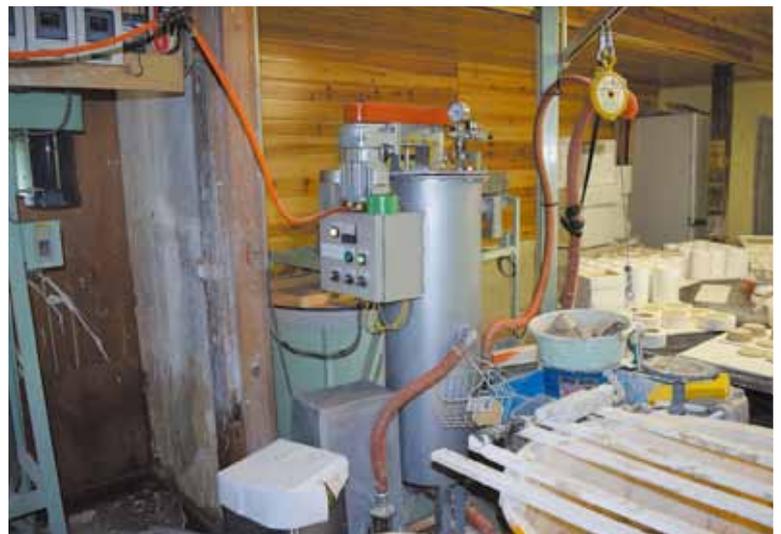
価値の高い飲食器の製造を開始した。食器は販売価格が決まっているうえ、伝統的に複数の問屋を経由するため窯元の利益は薄かった。また大量消費の時代が終わるにつれ出荷数も減少。瀬戸焼の伝統を守るため、窯元が自身で値決めをできる自社製品の開発が課題となっていた。

染付窯屋眞窯は、100年以上の歴史をもつ染付磁器の窯元。親子4代にわたり瀬戸染付焼の技術を継承している。染付焼は器などを形作る素地（きじ）にゴスと呼ばれる顔料で絵を描き、釉薬をかけ焼成したやきもの。磁器の白色を生かしたデザインと、細部まで使いやすさを意識したモノづくりが評価され、全国の百貨店に加え海外は台湾を中心に製品を納める。

創業時は旅館などに納める小鉢を生産していたが、3代目窯主である加藤眞也さんの「百貨店に置いてもらえるような製品をつくりたい」との思いから、付加

### 振動ふるいで歩留まり向上

平成28年にデザイナーの島村卓実氏と自社ブランド「FLOW」を立ち上げた。製造するのは釉薬をかけない珍しい製法の食器だ。通常は釉薬をかけ焼成することで表面にガラス層を作るが、釉薬をかけずに焼くとしっとりとした独特の質感が出る。手がける窯元の少ない高付加価値製品だが、同時に高い品質も求められる。焼成で発生する細かい傷や、素地に混入した微量な鉄粉による小さな汚れなども不良となる。不良は焼成時に発生するため、時には完成品の4割程度が不良品となり歩留まりが悪かった。



歩留まりを向上させた、流し込み排泥鑄込み用設備

「平成28年度補正革新的ものづくり・商業・サービス開発支援補助金」を活用して導入したのは、不純物除去機能のある白磁用の流し込み排泥鑄込み装置。不良の原因となる鉄粉や、乾燥した素地の細かいかすなどを振動ふるいで取り除くことができ、不良品が1割に減少した。

## こだわりの製造でファン獲得

流し込み排泥鑄込み製法は、石膏型に流し入れた液状の素地を、型の表面に固着させ器の形を作る。主に急須や花瓶など中空の器に用いられ、皿類は珍しい。高度な技術のため採用する窯元は少ないが、窯主の娘で4代目の加藤真雪さんは「手仕事のあとが残るモノづくりを大切にしたい」とこだわる。二つの石膏型の中に圧力をかけて泥を注入し成形する圧力鑄込みという一般的な方法では、無個性な仕上がりになってしまうからだ。



個性が生まれる流し込み排泥鑄込み製法

こうしたモノづくりへのこだわりが世間から評価され、製品の売り方が大きく変わった。値決めが自分たちでできるようになり、卸問屋からの値下げ要求がなくなった。また使い勝手とデザイン性を追求した製法に共感したファンも増え、直接販売の割合が増えた。コロナ禍で卸問屋からの発注は減少したが、インターネットを通じて多くのファンが製品を購入。これまで1割程度だった直接販売の売上げが令和2年度には3割まで拡大。出荷数は減少したものの前年同様の売上げを維持した。

## 消費者とのつながりに焦点

消費者行動がモノ消費からコト消費に変わる中、窯元にも変化が求められている。眞窯が特に力を入れるのは、発信力の強化だ。中小企業基盤整備機構が実施する地域資源活用の支援やセミナーをきっかけに、消費者と製造元が直接つながるモノづくりの重要性を実感。消費者との距離を縮めることで選ばれる製品にしていきたいと考えた。イベントでの対面販売をはじめ、コロナ禍で直接足を運ばない消費者に向けSNSで情報を発信する。「これまでは品質の高い製品を作れば評価されていたが、これからは窯元のもつストーリーも含めて評価される時代。こだわりの製造を発信していきたい」（同）と熱意を見せる。



工房の隣にギャラリーを構える

## 企業データ

企業名	染付窯屋眞窯(しんがま)
代表者役職名・氏名	窯主 加藤真也
設立年月日	平成11年12月20日
住所	〒480-1218 愛知県瀬戸市中品野町330番地
電話	0561-41-0721
FAX	0561-41-0721
URL	http://singama.jp/
E-Mail	singama@gctv.ne.jp
資本金	(個人事業主)
業種	和飲食器製造業
従業員数	3人(専従者)



「ぬくもりある食器をつくり続けたい」と話す加藤さん一家